

評議会の議事内容が大学史編集室で整理されていたので見やすかったが、それでも十年間分はかなりの分量であった。学部長会の議事内容は評議会の議事内容ほどの分量はなかったが、両議事内容全部を見るのに、夏の暑い時期に延三日かかった。この作業をするに当たって、編集室の方々にはいろいろ便宜を図ってもらい、お世話になった。また、同編集室の事務の方には、資料等のコピーでお世話になった。

(教育学部教授)

## 大学史編纂を振り返り、将来に期待する

元兼任編集室員 鈴木英一

### 一、名古屋大学五十年史の発端

『社史に見る太平洋戦争』（井上ひさし編、新潮社刊、一九九五年）という本がある。新聞社、出版社、銀行、大企業等々三十四の会社・団体・学校などの「〇〇年史」を編集して、戦中戦後の激動の歴史を綴ったものである。このように、さまざまな団体が自己の活動の歴史をまとめ、刊行しており、教育史の場面でも、地方教育史と並んで、学校史が無数に刊行され、当事者は勿論のこと、部外者にとっても、教育の営みを詳細に明らかにする貴重な資料となっている。

ところが、今回、『名古屋大学五十年史』が刊行されるまで、本学にはまとまった全学規模の通史はなかったし、学内にこの遅れを指摘する声も皆無であったので、私は、かねがねそれを不満とされていた。その私が、なんとか、

本学の通史刊行を実現しなければならぬと決意して、教育学部内(教育学科)で提起したのは、一九八三年春のことである。

一九八三年六月二〇日付「名古屋大学五十年史企画試案」という私の手書きのコピーがあり(当時は、今のようにワープロの普及していない時代であった)、これを学部内討議のたたき台とした。それによれば、「趣旨」として、次のことを訴えている。

「(前略)(本学は)昭和六四(一九八九)年には創立五〇周年を迎える。この時点で総合大学としての名古屋大学の歴史をまとめ、未来に向かって新たな礎石とすることが必要である。

他の総合大学では、いずれも通史を有している上、新たな一〇〇年史、五〇年史の企画に着手しているのに対比し、本学の取り組みはいちじるしく立ち遅れている。全学の一致した取り組みのもとに、五〇年史の企画をスタートさせる必要がある。」

当時の私の思いが滲み出ている。さらに、この「試案」は、組織と手順についても提言しており、実際の歩みとほぼ同じである。期間は一九八四年から五ヶ年計画でスタートさせることとし、通史・部局史の二巻構成であった。大筋は当日の会議で認められた。幸い、当時の教育学部長は、教育史講座の江藤恭二教授で理解があった。

同年八月三日午後一時に、江藤学部長、潮木教授とともに、学長室に飯島宗一学長を訪ね、早速この件を切り出した。私たちの説明を聞きおわると、飯島学長は即座に「やりましょう」と賛同して下さった。こうして、学長のゴーサインの下、全学段階でスタートする。その後十数年の歳月を要したけれども、関係者多数の協力と努力で、私が当初予想したものよりも、質量共に遙に立派な『名古屋大学五十年史』の刊行を見たことは、喜びにたえない。

二、名古屋大学に公文書館(アーカイヴス)の建設を

一九八〇年代から今日まで、米国に十数回史料調査にかけた。とくに、八五年、八六年と二年にわたる海外学術調査の折りは、全米各地の大学など教育機関を、二十数州にわたり訪れた。そこで、感心するのは、どの大学でも、立派な公文書館（アーカイヴス）があり、懇切丁寧なアーキヴィスト（公文書管理の専門職員）が配置されていることである。公文書館は、大学図書館に併設されていたり、独立の施設であったり、様々である。図書館に併設されている場合も、他の閲覧室などとは異なり、豪華な特別室であることが多い。アトランタのエモリー大学ウッドラフ図書館は、卒業生でコココーラの創始者が寄贈したものである。八階建ての最上階に立派な公文書館があり、体が沈むようなふわふわした絨毯が敷きつめてあり、公文書館の隣は、コココーラ初代の社長室が再現してあった。同じ南部の北アラバマ大学の公文書館に、米国対日教育使節団員ノートン元学長の文書を見に行った折には、「なんで日本人がここまで来たのか」と、地元テレビ局や新聞社の取材を受け、「日本の教授ノートン文書を研究―ノートン日本に民主教育を勧告」と大きく扱われたこともある。西部のホイットマン大学の公文書館には、イールズ事件で有名な占領軍の高等教育顧問ウォルター・クロスビー・イールズの収集した日本の大学改革の文書が公開されており、誰でも利用できる。

どの公文書館でも、歴史上の大きな出来事や特別な分野で活躍した人物について、大学が積極的に収集し、購入した史料群や、当該人物を含め個人が寄贈した史料群をそれぞれ分類整理して、リストをつくり、史料の主体である個人や機関の名前をとって、〇〇コレクションとか、〇〇ペーパーズと呼んで公開している。公開に当たっての規則は当然に厳しい。入室前に不要なものはロッカーに預ける、史料の筆写は鉛筆に限られる、一コレクション当たりのコピー枚数の制限など様々な制約があり、史料が厳重に保管されている。コココーラの社長の寄贈でも、館内の飲食は禁止されている。館内の閲覧机で缶飲料を飲んでいる学生をアーキビストが見つければ、「エクスキューズ・

ミー」といって缶を取り上げ、隅の手洗い台で中身を捨て、ついでに缶も屑入れに捨てるのを目撃したことがある。相手に有無も言わせぬ一瞬の出来事に驚くとともに感心した。

このように、米国の大学は、それぞれの公文書館の貴重なスペシャル・コレクションを、セールス・ポイントにして競い合っているように思われる。また、建国以来の歴史が浅い米国では、歴史を創造しようとする意気込みが、日本と違うことを痛感する。日本の大学は、とりわけ名古屋大学こそ、今後の生き残り作戦のためにも、この点を大いに学ばなくてはならない。

今春、名古屋大学史編集委員会、名古屋大学史編集室がそれぞれ任務を完了し、新たに、名古屋大学史資料委員会、名古屋大学史資料室が発足するということである。今回、名古屋大学五十年史編纂の過程で収集した膨大な史料の整理・保管・公開は重要な仕事であり、今後の活動に期待したい。

名古屋大学関係史料の保管は勿論のことであるが、さらに将来、例えば臨時教育審議会委員など永く大学行政に携わっておられる飯島元学長の「飯島宗一文書」とか、法学部が所蔵する戦前の大学自治の受難者の「滝川幸辰文書」のような貴重な史料を選定して一堂に収容し、広く国民に公開する『名古屋大学公文書館』が是非とも欲しいものである。このことを名古屋大学教職員に広く訴えたい。

(名古屋大学名誉教授)